

野洲市六条水害履歴マップその②(全4枚)

(H26.8.7・8.21野洲市六条389、H27.7.5 野洲市六条自治会館で行った聞き取り調査に基づき作成)

-昭和28年台風13号被災時の状況-

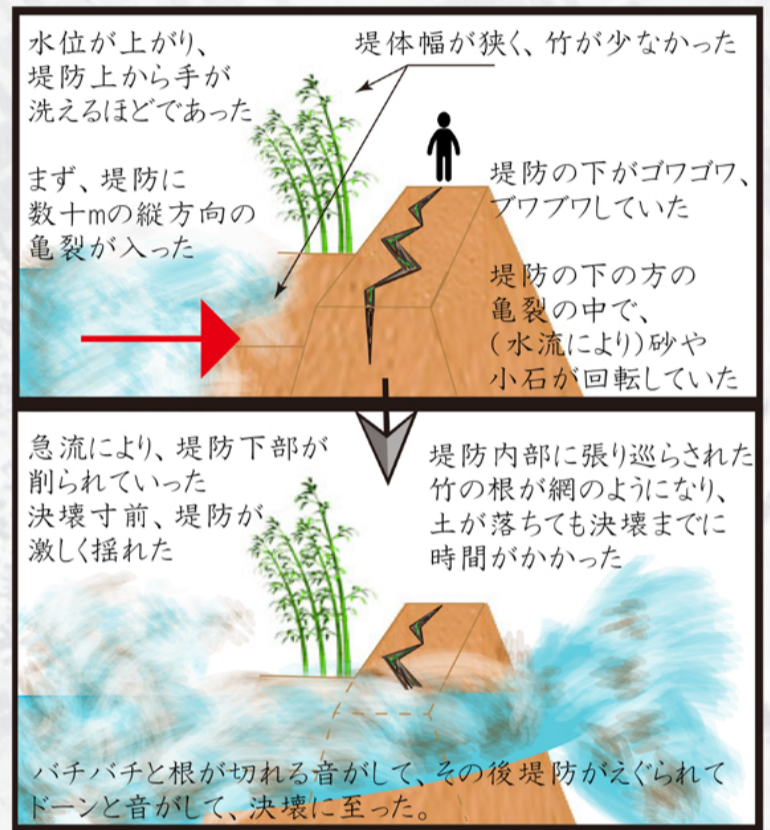


決壊時の堤防付近の様子

○水防活動・指示

- ・決壊箇所付近で、50~70人が見回り水防活動をしていた。(六条の消防団員を含む成年男子全員の40~50人と、安治から応援に来ていた10~20人)
- ・どんごろす(麻袋)や米俵に、堤防周辺の土を入れて土嚢をついたり、堤防の割れたところに泥を詰めたりしていた。
- ⇒当時、堤防からの越流については警戒して土嚢積みを行っていたが、堤防から水が浸み出して破堤するという点については意識があまりなかったように思う

○決壊時の堤防の様子



- ・水防活動していた人は、川の水が堤防を越えることを警戒していたため、点検のために降りた人を除いて、皆堤防の上にあった。
- ・堤防上の人たちは、もうダメだと思い、堤防の上手と下手に分かれて逃げた。
- ・堤防の下にいた4人が流され、うち1人は松や墓標に捕まって助かったが、残りの3人は亡くなった。
- ・うち1人の遺体は、水害の約半月後まで発見できなかった。

○対岸の様子

- ・津田では寺の鐘を鳴らして色々な合図を出す慣習があったため、水害時も津田の鐘の音が響いていた。
- ・津田の人達も対岸側の堤防の上で警戒を行っていた。
- ・津田側が決壊すれば六条側が助かり、六条側が決壊すれば津田側が助かるので、決壊時、津田の人たちが万歳するのが見えたと言う人もいた。

その他の被害

- ・風で家が壊れた。
- ・墓地から墓標が流された。
- ・鶏が流された。
- ・稲刈り直前の時期であったため、田んぼの被害による損失が大きかった。

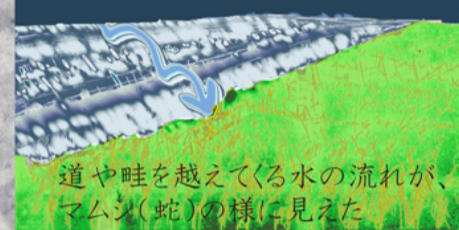
水害による生活の変化

- ・米など大事なものを高いところに置くようになった。
- ・泥だらけになった稲穂を脱穀する際、従来の足踏み脱穀機では埃が舞ってどうしようもなかったため、脱穀機の機械化が進んだ。
- ・水害後も水防のバトロールは続けられていたが、放水路の完成後行わなくなった。

決壊から浸水まで

- ・決壊前から、堤防にいた人たちが危ないことを知らせてくれたので、在所では準備をしていた。
- ・決壊を知らせる叫び声が聞こえてから、避難を開始した。
- ・六条まで水はゆっくりやってきたので、身支度を整える時間があった。(決壊から在所に水が来るまでは、ご飯を一升炊ける時間(当時の釜炊きで約30分)があると、伝え聞いていた。落ち着いて行動するようにとの教えであろう)

時刻は深夜、月が出ていたため比較的明るかった。



避難の様子

- ・避難時、中学校の運動場は、それまでの降雨で足がはまるくらいにぬかるんでいた
- ・鶏を箱に入れ、お米を床上に上げ、牛を連れて、水の中を歩いた
- ・年配者が気を遣い、自然と避難の声かけや共助が出来ていた(普段から近所づきあいがあった)

堤防からここまで流されて、家につかまって助かった人がいた

安治

兵主大社参道の松が流された

法蔵寺
最初に避難したが、ここまで水が来ると聞いて、中学校に移動した

井口

平均で30cm程度浸水した

六条

区内の家の殆どは、床上40cm程度浸水

中主中学校
1カ月強、避難生活を送った

村田
明治の学校跡地。土地が高く、牛を非難させた

吉地

比留田

婦人会の方が、泥かきの奉仕作業に来てくれた

決壊箇所

乙窪

避難生活・復旧作業

- ・水に浸かった米のご飯は、茶色く臭くて食べられなかった。
- ・泥水が乾いてカピカピになったものを「ニコ」と呼んだ。
- ・水害後、六条内の成人全員が昼も夜も、復旧作業と行方不明者捜索にあたった。
- ・全国から日赤奉仕団が奉仕作業に来てくれた。
- ・隣の中里村の人たちが、応援に来てくれた。

水位が上がり危険であったが、六条で破堤したので一気に水位が下がった

滋賀県空中写真/守山市/コース4/048,049
国土測量株式会社 発行 昭和35年 出版

